うて居られる、十四世紀といふのは此の場合可なり漠然たる時代の附け方で、元のものとするか、明のものとするか判じ難いのであるが、篇中には李文田が祕史の註に「影元槧本」というて居るものを、Copie manuscrite reproduisant l'edition du XIVe siècle と譯してあるのから考ふれば、氏の十四世紀といふのは元代を指したものと思はねばならぬ、從つて同氏は祕史の漢譯年代を元代に置く一人と見なければならぬ次第である。

前に記した皇明實錄洪武十五年正月丙戌の條は、李文田の註釋した元朝祕史の卷末に附載して居る如く、今言にも、日知錄にも引用してあり（此の一節はまた富岡謙藏氏所藏の文書なる叢書中の四譯館考の中にも引いてある）、ともに文字に多少の相違はあるけれども、大體に於いては誤つて居らぬのである、此の條は勿論華夷譯語の編纂のことを以て始終して居るものであつて、決して元朝祕史の漢譯のことに關說して居るものではない、那珂博士が「復令取元祕史參考、以切其字、諧其聲音」とある今言の文から參考の二字を省かれたのは、偶然の過誤に過ぎないであらうけれども、これは金井氏も論ぜられたやうに、甚だ大切なる二字を落されたものである、祕史の連筠簃本にも、李文田の註釋本にも、ともに此の一句については洪武實錄を正しく引いた日知錄餘卷四を載せて、「復取元祕史參考、紐切其字、諧其聲音」とあるのを顧みられなかつたのは、全く解釋に苦しむ所である、然も此の二字なくとも、なほ「取元祕史、以切其字、諧其聲韻」とは博士の解釋せられた如く「祕史の蒙古字の音韻を分析し、漢字を當てゝ善く諧はしむるを云ふ」（成吉思汗實錄序論一三）と解かねばならぬとは思へない、既に存せる漢譯元祕史を取り來り、これによりて華夷譯語に用ゐた文字を聲音を諧へたと見て少しも差支ない、況んや「以切」の二字は「參考紐切と」とあるものゝ誤りである以上は、此の一句は華夷譯語の文字を紐切し、聲音を諧へる爲に、漢譯の元祕史を參考したとの意なること甚だ明亮である、「元祕